

最優秀賞 受賞作

## 外国人労働者と日本

福岡県立宗像高等学校1年 荒 牧 咲

外国人労働者の受け入れを拡大する改正入管法が成立した。人材確保の難しい分野や地域の業務で外国人労働者を受け入れること、技能試験に合格した外国人労働者に在留資格を新設することがねらいだ。

私の祖母が働く縫製工場にも、中国人やベトナム人など多くの就労外国人が働いている。彼女たちは、真面目で、儉約家。通勤は自転車で、髪を切るのもひかえ、お金を貯めているそうだ。私は、そんな勤勉な方々にこそ、母国と同じような快適な生活を送っていただきたいと考えている。

しかし、現実には厳しいようだ。差別や低賃金などで苦しんでいる外国人労働者がいる。また、家族帯同ができないために、子供たちを母国に置いて、働きに来ている人もいるという。

今回の改正入管法には、そのような外国人への支援も取り入れるべきだと考える。例えば、家族帯同や在留資格の基準を緩和することだ。そうすれば、就労外国人の失踪を防いだり、外国人労働者が家族といっしょに暮らすことが可能になると思う。また、政府は日本語教育にも力を入れるべきだ。言葉は、技能習得やコミュニケーションにかかせないものである。日本語を学ぶことは、外国人労働者が「言葉の壁」を感じることなく、日本で快適に暮らすことにつながると考える。

私は、政府による支援の他にも外国人労働者にとって必要なものがあると感じる。それは地域の人々の思いやりだ。

近年、就労外国人の増加に伴って、ハーフの人口も増えている。私が読んだ記事には、アフリカ人と日本人のハーフが「アフリカ系=身体能力」という偏見に苦しんだと書かれていた。正直、私も「ハーフは美人」などという偏見を持っていた。このような偏見や差別が無くならないければ、外国人労働者が日本で幸せに暮らすことはできないだろう。

私の習い事の先生は、家の近くの工場で働いている外国人労働者を家に招いて、ご飯をふるまうことがあるそうだ。私は、事実上「移民大国」である日本にとって、このような思いやりが最も重要だと考える。

これから、外国人労働者と日本人がより良く共存する社会を築いていくために、自分の考える「思いやり」を実行していきたい。